

独逸経済学における国民経済の意味

著者	赤羽 豊治郎
雑誌名	關西大學經濟論集
巻	9
号	6
ページ	557-576
発行年	1960-03-20
その他のタイトル	On Volkswirtschaft in German Economics
URL	http://hdl.handle.net/10112/15570

独逸経済学における国民経済の意味

赤羽豊治郎

ベルンハルト・ラウムはその近業「国民経済の原型」⁽¹⁾において、独逸語 Volkswirtschaft が独逸経済学に出現して以来すでに百五十年を経過せるを説き、その由来を考証した。

氏によると、この語をスミス学者ゴットリーブ・フーフェラントが、ゾーデンやヤコブが用いた Nationalökonomie に対し、初めてその「国家経済学の基礎」⁽²⁾の序章において使用したが、かれ自身、不思議にも前後二巻八百頁に及ぶ大冊で、この新造の概念を利用せずに終ったといふ。⁽³⁾

ゾーデンはオルテスの先例に倣い、その主著を「国民経済学」(一八〇五年)⁽⁴⁾、ヤコブは「国民経済学原理」(一八〇九年)⁽⁵⁾と名づけ、それぞれ国民経済を国家利益とは別に市民社会のうちに求め、それが国家との関連において考察せられる場合のみ、国家経済の名称を用いているのである。

註 (1) Bernhard Laun, Das Urbild der Volkswirtschaft, Tübingen, 1957, S. 9.

(2) Gottlieb Hufeland, Neue Grundlegung der Staatswirtschaftskunst durch Prüfung und Berichtigung ihrer Hauptbegriffe von Gut, Wert, Preis, Geld und Volkswerten. Gießen, 1807. Bd. I, 1807, Bd. II, 1813.

ゴットリーブ・フーフェラントは一七六〇年ダンチッヒに生れ、ライプチッヒとゲッチンゲンに学び、多年イェナの法

学教授として盛名を走せ、のちウルツブルグ、ランズフートに移り、一八一七年ハレにおいて没す。独逸歴史法学の創設者たる若きザヴィニーはかれの講義を訪い、よい印象を得たといわれる。これはザヴィニーがランズフートのかれの後継者となつた事実によつても明かであらう。

(6) Laun, Ebenda, S. 11.

(4) Giannara Ortes, *Errori popolari intorno All' Economia nazionale*, 1774.

August Oncken, *Geschichte der Nationalökonomie*. Leipzig, 1922, S. 26.

W. Roscher, *Grundlagen der Nationalökonomie*, Stuttgart, 1900, S. 43, Anm. 1.

(5) Graf J. v. Soden, *Die Nationalökonomie, ein philosophischer Versuch über die Quellen des Nationalrechts und über die Mittel zu seiner Beförderung*, Leipzig, 1805—1812, 9 Bde.

(6) Ludwig H. Jakob, *Grundsätze der Nationalökonomie oder Grundsätze des Nationalrechts*, 1809.

(7) Laun, Ebenda, S. 13.

—

元來、スミス経済学の独逸流入は「まずゲッチンゲンのなかでまたそれを越えて」⁽¹⁾行われ、一時は独逸の官房学たるカメラリストの経済論を制圧し、かのシュタイン・ハルデンベルヒの行政改革に理論的武器を提供したほどであつた。

グラフ・フォン・ソーデン⁽²⁾の地位は独逸スミス学派の左派ともいうべきハレのルドルヒ・ハインリッヒ・ヤコブ⁽³⁾のそれにほぼ等しい⁽⁴⁾。ヤコブは「スミスの産業主義を祖述しその普及に」努め、「行為の自由は国家の準則」たるを主張したが、のち官房学派に接近し、国家ならびに公共利益の優先を説くに至つた⁽⁵⁾。

ゾーデンはヤコブと同じくカントの影響を受けたとみられ、経済の倫理的性格に注意を払い、「国民経済の原則は社交的人間の物質状態の最高度の完成にある。この原則の倫理は物質的福祉を欠けば道徳的・文化的・美的感情とその表現、さらに人類が動物世界と異なる性格として有する高貴性の主張は考えられない点にある。ただし、貧困は野卑・悪徳・無知・遅鈍の母であるから」といひ、「国民経済に適合する高度の倫理的原則がないならば、国家経済は一切の適法性を失う。」⁽⁷⁾ともいつている。かように、国民経済と国家経済とは区別されているが、それらは国家と国民の本質にかかつているのである。

かれは国家の本質を社会的行政や各個人がその社会状況においてもつ権利義務の決定という関連における社会集団であり、国民は社会的結社という協力関係にみいだされる人間集団とみている。この相違はそれぞれの営む経済的機能を異ならしめる。国民経済は個人経済の集合とみられ、「社交的結社における個人の福祉の促進―それがたといこの結社に関係をもたなくても―」を主題とし、「人類の身体的・道徳的組織から、社交的人間が福祉を求め、その実現の手段を獲得し保持するため準拠すべき法則を説く。」これに反し、国家経済は「物質的福祉という意図において、社会としての国民全部に最高の完全性を保証する目的で国家状況に適用する原則」⁽¹⁰⁾を明かにするのである。前者は私経済的見地に徹し、社会的体制を取扱わず、各個人が社会でいかに最大の福祉を実現し得られるかを問題とする。が、後者は「国家の存立という目的に最高の完全性を与える政治原則」を考究することになる。両者はかかる関連にあるが、ゾーデンの重視するはもちろん国民の福祉の確保であつて、国家経済はこの目的に合せて国家の社会的機械の一切の車輪を組立つべきであり、だがそのためには個人の自由活動を妨碍すべきでなく、国家活動は努めて一定の限度を守らねばならぬ、とみるのである。この見地に立つ限り、かれは明かにスミス学

派の一人であり、国家干渉の消極論者である。かれが消極的態度をとりながら、他面国家の政策目的が、最大多数の国民の福祉を清く完全に保持するには、「その配慮につき国家は何等の制約を受けるものではなく、その実施手段において社会結合の基礎たる財産権以外は何等の制約もない、⁽¹¹⁾」とさえ論じている。これは恐らく国家経済が、強制権に結ばれる義務をもつ、一つの国家権力であるからであり、この意味において、「ひととはかかる権力が正しき存在たるを争うことはできぬ、⁽¹²⁾」とする当然の帰結であろう。

ゾーデンのかかるスミス理論修正の動きは個々の経済概念の叙述においても現われる。その顕著なものに生産力の理論がある。かれはまず、生産力を「それによつて原料の当該部分が享樂に進捗する力、⁽¹³⁾」と規定する。原料の變化によつて享樂手段（財）が生産されるわけであるが、原料そのものは直ちに国民の富となるわけではない。それが国民各自の、あるいは国民全体の生産力と結合して始めて持続的に国民の富たり得るといい、⁽¹⁴⁾ 生産力は有形財の生産に止らず、「人間の福祉を促進し増加する享樂、それ故に例えばまた学者の研究も、さらにわれわれの物理的研究（農学者・化学者等の）ないし精神的鑑賞（講演者・詩人等）を高める一切の作業や役務も生産的であり、その創造者は真の生産者である。生産物の確保、例えば財産の保全や各自の健康保護を職務とする、全官吏もまた同様の事情にある、⁽¹⁵⁾」として、精神的資本（リスト）のそれに関連する。

また「生産力は財産の本質的部分であり、原料の如く価値をもつ。「価値なき原料は生産力の程度に従つて価値計算が行わる。生産物に内在する生産力こそ、矢張り原資材より遙かに大なる価値を有する、⁽¹⁶⁾」一見、リストの生産力の理論を予見せしめるが如き論議を行い、進んで生産力を (一)各個人の生産力と (二)国家の生産力に分つ、⁽¹⁷⁾ 前者は農・工・商の各産業部門における各人の努力に待つが、⁽¹⁸⁾ 後者は国家のなす国民財産を裕かならしめる一切の

組織的立法と規制的政策・司法ならびに財政的立法に再分する⁽¹⁹⁾。国家の努力は何よりもまず最高度の生産力に見合う原料を調達し、各人の生産力と国民全体の生産力を立法と行政的手段を通じて、国民経済の法則に従い、これを組織するにある。かような立法により、国民の大部分を福祉に導く享楽手段をその能力に依じて持続的に獲得し得ることとなるう、とみるのである。この場合、生産力を既存の原料に適応する方法で組織するのが理想であり、国土の境界がこの方策のマルクシュタインとなる。もつとも、この理想となる原料増加の傾向は国家権力によつて排斥されることがあるといひ、フィヒテの「封鎖商業国家」との接触を試みているのである⁽²⁰⁾。

註(一) Wilhelm Treue, Adam Smith in Deutschland. Zum Problem des "Politischen Professors" zwischen 1776 und 1810. in "Deutschland und Europa" (Hans-Rothfels- Festschrift), Düsseldorf. 1951, S. 102.

(2) グラーフ・フォン・ゾーデンは一七五四年アンバッハに生れ、プランデンブルクの枢密院に職を得、のち顧問官となる。

一八九〇年伯爵に叙せられ、一七九七年以来所領地で農業と研學に従ひ、晩年バイエルンの國政に参与し、一八三一年没す。

(3) ヤコブは一七五九年柏林に生れハレに学び、一七九一年以来その教授の地位にあつた。ハレがフランス軍の占領と共に大学の閉鎖によりカルコウと呼ばれ、一八一六年ハレに復帰した。その間ロシアの貨幣事情の研究に従事した。かれの主著は二十間に三版を重ね、またセイの独訳者として名高い。

(4) Soden, Ebenda, Bd. I, 1815. Nachschrift zu Vorwort.

(5) Treue, Ebenda, SS. 119—120.

(6) Soden, Ebenda, S. 13.

(7) Soden, Ebenda, S. 14.

(8) J. Grünfeld, Die leitenden sozial- und wirtschafts-philosophischen Ideen in der deutschen Nationalökonomie. Wien. 1913. S. 61.

- (9) Soden, Ebenda, S. 11.
- (10) Soden, Ebenda, S. 19.
- (11) Soden, Ebenda, Bd. II, 1805, S. 291.
- (12) Soden, Ebenda, Bd. I, 1815, S. 21.
- Soden, Ebenda, S. 29. und Bd. II, S. 7.
- (13) Soden, Ebenda, Bd. IV, S. 40.
- (14) なお、諸人を生産者とみるソーテンの所説は、夙にロッシヤの注意するところとなつてゐる。(22)
- (15) Soden, Ebenda. Bd. I, S. 125.
- (16) Soden, Ebenda. SS. 132—133.
- (17) Soden, Ebenda. S. 23.
- (18) ソーテンはかかる生産力を明確に (一)原始生産力 (二)工業生産力 (三)商業生産力に分つ。Ebenda, Bd. IV, S. 42.
- (19) Soden, Ebenda, Bd. I, S. 24.
- (20) Soden, Ebenda, S. 32.
- (21) 拙稿「フービテの封鎖商業国家論」信州大学文理学部紀要。第八号。(昭和三十三年)
- (22) W. Roscher, Geschichte der National-Oekonomie in Deutschland. München. 1924, Zweite Auflg. S. 679.

二

かようなスミス理論修正の動きは、やがてアダム・ミュラーやフリードリヒ・リストによる尖鋭な批判を通じて、その頂点に達したとみるを得よう。ひとはここに独逸経済学の成立をみとめ、そこに英仏経済学の個人主義的・物質主義的経済理論の超克が行われた、となすのである。(1)

アダム・ハインリッヒ・ミュラーは学をゲッチンゲンに修め、熱心なスミス学徒の一人たる時期をもつた。(2)かの

フィヒテ批評はこの立場において行われたが、⁽³⁾のちシュリングの自然哲学の研究あるいはフリードリッヒ・ゲンツとの交遊は、遂いにかれを次第に浪漫派に近かつかじめ、その主要代弁者たらしめるに至つた。

ミュラーの経済論は経済が国家の有機的組織の一分肢たる認識に始まる。人間は、すべての生成物が自然と結合しているように、また市民社会のなかにあつて、すべての方面から国家内に織り込まれ、個人は国家から抽出せられることはできぬ。従つて、人間は国家以外において考えることができない。ところが、従来、国家を概念的に把握する傾向があり、一たん定義づけるとそれはもはや新事態を説明し得ないこととなる。

「国家ならびに一切の偉大なる人間的事件にはその本質を言葉や定義のなかにひきくるめ、あるいは詰め込み得ないところのものがある。…：通常一般の諸科学が国家や生活や人間についてひきづりまわし、売物にするところの、かた苦しい一たびまとめおいただけの形式をわれわれは概念という。しかし国家に関してはいかなる概念も存しない。」「われわれがこの高貴の対象について擱えた思考を拡大してみると、もし対象が運動し成長するに对应し思考が動き成長すれば、われわれはその思考を事物・国家・生活の概念といおう。⁽⁴⁾」ここに国家をつねに生成・運動の過程において把えんとするかれの動態的思考をみいだす。⁽⁵⁾この思考はミュラーにおいて、国家を生態のままに、有機体的全体として考えることを意味した。それ故に、スミスのその如き、「国家は単なる製造工場・農場・保険局あるいは重商主義者の組合でない。国家とは国民の身体的精神的欲求の全部・物質的精神的富の全部、内的外的生活を緊密に結合して、無限に運動する巨大強力なる生ける全体である。⁽⁶⁾」人間事件の包括的全体であり、一つの生ける全体への結合である。なるほど、われわれは人間制度の重要ならざる部分をこの関連から切離すことができようが、それではもはや生活現象として、理念としての国家を感得することはできない。国家は人事のすべ

て不可分な有機体組織である、というのである。

かような国家観に立つ限り、国民経済は自立的な存在として扱えられず、国家の営む「人間事件の全体の経済的側面」⁽⁷⁾と解せざるを得ぬ、国家有機体の分節として理解せられねばならない。この関連は「先ず人間と事物(財)との関係、第二に人間と事物とが国家に対する関係」であるが、個人経済は国家組織の一分肢として、また国家は個人の経済的生存の保証に努むべきものと規定される。かく、ミュラーの国民経済は国家あつて始めて成立するとみられ、ゾーデンの国家経済に近ずき、さらに前進して国家こそ、経済生活の基礎であると論ずるに至つた。かれの一切の経済理論はこの根拠から立論され、すべてを「飛躍の、生の、運動のなか」⁽⁹⁾で取扱うとするのである。

この理論はもちろんかれの経済思想を貫く。富を論ずるにあつて、「富は概念でない、単なる事物に存するにあらず、ひとが事物を確保し増加する間にもそれは確定されない。(反つて)その使用のうちに、所有のうちにみいだされる。富は何んであろうと、それは権利とまつたく同様に、静止において、あるいは貯蔵された財産からは、認識することはできない。」⁽⁸⁾というが如き、あるいは「この国民の諸力および所有の単なる評価、一般に数字で表わし得る一切は富の所在を確め得るにすぎぬ。富の実体は使用のなかに、運動のなかのみ認識され示される。」⁽¹¹⁾と論ずるはそのよき例である。ミュラーのこの立場では富はその存在よりも生産過程が重要となる。ところが、生産は独り筋肉労働に限らず精神的諸力の共力にまつことが多い。これらの諸力はスミスが非生産的とみなした俳優・音楽家・奴婢・ある種の為政家・僧侶・学者のそれである。かれの生産力の理論はこの種の精神的財貨の主張に支えられている。まず学説を回顧しよう。

「コルベールの重商主義的、ケネーの重農主義的およびスミスの自由主義の三大宗派の解決せんと努めた問題

は、如何なる勞働こそ生産的であるか、またじじつ國家を富裕に導くのであるか、ということであつた。これに対する解釈は時の経過に伴うて漸次正しい方向に進んだのである。コルベールは貴金屬に、ケネーはすべて地上の所産を加工し変形するものを除いて農業勞働に、最後にスミスは交換価値をもつ財の創造にのみ、嚴格なる意味の生産が齎らされるものとみた。だが、そこには國家において如何なる力、また行為が保存せられているか。如何なる勞働が持続と動産財との間を調節しているか、という二つの重要な問題にまつたく触れていない。官吏の經濟的重要性に就ては何人もこれを認めるが、スミスはこの種の勞働を生産的勞働者の範圍から除いている。かれの意見ではそれらは市民的交換において讓渡し、かつ商業の通則に従う有形的商品を生産しないがためである。⁽¹²⁾」

さて、かれのスミスの生産力説批判であるが、勞働の生産力には段階があり、その重要性は國家の必要によつて附与され、必ずしも交換価値の大小に依存するものではない、と説くのである。「勞働の生産力にも無數の段階がある。勞働者は元來欲望と生産物とを媒介するにすぎず、欲求がより必然的より一般的になれば、生産も亦より必然的・一般的となる。すなわち、生産力はより重要となりより大とならねばならぬ。生産力の度合を計るに市民の必要あるいは國民のそれ以外他の尺度がない。國家における全個人・全生産は個別的・市民的価値(交換価値)をもつと同じく、全生産力は個別的・市民的の二重の価値をもつ。あらゆる種類の生産は可能なる限り、しかし重要であり、市民的であり、國民的である如く努める。時に一生産は他のそれを凌駕しよう。凶年には農業は商業より重要であり國民的であり、豊作の年には商業が他に較べ重要とならう。開戦となるや軍需工業者が他の一切に凌駕する。結局、個々の生産者の最高の利益は自然的かつ市民的事情に制約されよう。短言すると、かれの生産と他の需要者との間を、より高い生産者・政治家から媒介されよう。それ故に、一切の生産に自然的制限を指示する力と國

家経済の巨大な運動とが、上場日の取引所における無数の取引を整理するのである。⁽¹³⁾」

われわれはまた右の文章のなかで、国家は法律を制定し秩序を維持して一切の生産に可能性を提供する力あることを想像しなければならぬ。「この力こそ、一切の生産の不可欠条件である。それ故に各個人の生産力はそれよりもより高き生産力、市民社会あるいは、国力から生産せられ媒介せられる限りにおいて、生産しあるいは媒介し得るのである。もし国家が自らを生産し得ることを停止するならば、そのなかでわれわれが国家と名ずける国民的生産が成立するところの、あらゆる小生産は自ら止まって仕舞うだろう。」⁽¹⁴⁾と断言し、個人経済の基礎は国家のうちに存在し、個人は全体の解消によつて、その存在の根拠を失う、とさへみるのである。⁽¹⁵⁾

註 (1) Jakob Baxa, Deutsche und undutsche Volkswirtschaftslehre. Ständisches Leben. 1/3 1931.

(2) アダム・ハインリッヒ・ミュラーは一七七九年六月三十日柏林に生れ、夙に法律学と国家学を修め、柏林においてゲンツ、シュレーゲル、ヴェルナー等の人々と交友し、一八一一年以来奥大利の宰相メッテルニツヒの知遇を受けそのブレインの一人となつた。各種の官職に就き一八二九年一月十七日維納で没す。主著「国家学要論」は一八〇八年の冬ザクセン・ワイマールのベルンハルト侯と多数の政治家・外交官に対したなした講義であつて、翌年柏林で公刊された。その学問は哲学・美学・社会学等頗る広範にわたつてゐるが、経済学に関しては右の要論のほか、「貨幣新論」(一八一六年)及び「国家学」の神学的基礎の必然性に就て(一八一九年)をあげ得るだろう。スマイス批判を通じて、浪漫派への回心事情に就ては、幾多の推察が行われているが、ここでは本文の如く解しておこう。

(3) Adam Müller, Ueber einer philosophischen Entwurf von Herrn Fichte, betitelt: Der geschlossene Handelsstaat."

(4) A. Müller, Die Elemente der Staatskunst. Baxa Ausgabe. Jena. 1922, Bd. I, S. 29.

(5) Müller, Ebenda. S. 20.

スラニー・ウンガーによると、ミュラーは経済事象を生成・発展において把え、その場所的関連に興味をもたなかつたところ。(16)

独逸経済学における国民経済の意味(赤羽)

独逸経済学における国民経済の意味（赤羽）

三四

- (9) Müller, Ebenda. S. 37.
- (7) F. J. Weiss, Grundlagen der Volkswirtschaftspolitik, Wien, 1929. S. 119.
- (8) Müller, Versuche einer neuen Theorie des Geldes, 1816. Dieser Ausgabe, Jena, 1922. S. 15.
- (6) A. Gray, The Development of Economic Doctrine, London, 1951. p. 221.
- (10) Müller, Elemente, Bd. I, S. 348.
- (11) Müller, Ebenda. S. 348.
- (12) Baxa, Die Wirtschaftslehre Adam Müllers. Nationalwirtschaft. Berlin, 1927/28. S. 134.
- (13) Müller, Ebenda. SS. 394—395.
- (14) Müller, Ebenda, S. 395.
- (15) Baxa, Ebenda. S. 136.
- (16) T. Surányi-Unger, Philosophie in der Volkswirtschaftslehre. Jena, 1926. Bd. II, S. 135.

四

スミス批判の尖端に立つは矢張り、フリードリッヒ・リストである⁽¹⁾。もつとも、その批判は当時後進国たる独逸の「経済発達段階に基礎⁽²⁾」を⁽³⁾おいてである。批判の多くはスミス理論をあくまで英吉利のものであるとし、そのまま独逸に適用し得るものではない、との見解をとつた⁽⁴⁾。従つて、独逸のスミス経済学の継承は幾多の手加減が加えられたというべきであり、現にトロイエも、スミス理論として独逸で教授されたはスミスでなく、多分にゲッチンゲン・ケーニヒスベック的であつた、述べているほどである⁽⁵⁾。

独逸は一八一五年に至るも小邦分立し、互に高き関税障壁を築き隔離の状態にあり、全体としては未だ関税政策

の如き関税領域の統一を欠いていたから、独逸市場は外国商品に対し殆んど完全に公開されていたという。かかる事情はこの国が大陸封鎖の撤廃後の英吉利工業のよきダンピング市場として狙われ、英国商品の流入は漸く発展の境となり、ソーデンやミュラーによつて次第に培われたナシヨナリズムの主張が、かれの体系に結実するに至つたと解せられる。⁽⁶⁾

さて、かれの国家観であるが、これはその初期の一連の著作、なかでも「ヴェルテンベルクの等族国会の憲法案批判」において論ぜられている。その所説にお社会契約説の痕跡をみいだす。⁽⁷⁾しかし、国家組織をもつて諸自治体の階層的構成であると論ずるが主旨であつた。「国家は多数の下級団体の最高の社会的結合であり、自然的自由を保持しながら他の、同種の社会的結合（諸国家）に対立している。」国家の基底にあるは個人でない。家族や各種の自治体の如きコルポラチオンである。それは階層をなして国家を形成する。「国家は多数の州の結合であり、州は多数の県の結合であり、県は多数の市町村自治体の結合であり、それらの自治体は個人を全体的目的の到達に導く結合である。」⁽⁸⁾国家は全体の福祉を促進するため、個人の力を制限し結集する。しかし、個人は自己の幸福の創造者なるが故に、その自由なる活動をまつたく制限してはならぬ。その制限は個人の自然的自由が全体の福祉と一致せざる時、始めて法規によつて可能となるにすぎないというが如く、⁽⁹⁾かれの叙説に自由主義的・法治国家的思想の散在せられる個所あるを、看過してはならない。いづれにせよ、リストにとつては、国家は個人の組織なき集団でなく、秩序ある統一的共同体を意味する。

ところで、かれは主著の序文では、その全建築を国民体の性質のうへにおくと述べている。国民体はその後の叙

述では国民となつて見立つ。⁽¹⁰⁾「個人と人類との間には、その特殊の言語と文学とを、その固有の血統と歴史とを、その特殊の風俗と習慣・法律と制度とを、その存在・独立・完成および永続に対する要求を、また区劃された領土を有する国民が介在している。それは精神と利益との無数の紐帯を通じて独立に存在せる一つの全体に結合し、互に法律を承認し合い、そして今のところ未だ自然的自由を保持しつつ全体としては同種の他の諸社会に對立し、従つて現在の世界情勢の下においてはただ自らの力と手段とによつてのみ独立不羈を主張し得るところの社会であり」⁽¹¹⁾「国家の「力の源泉」⁽¹²⁾となつていのである。（傍点は筆者）

かような国民の実状をみると、ある国民は巨人であり、他の国民は侏儒である如く、文明・半開・野蛮の差がある。未開人を開化し弱小国を強大ならしめるのが、国家に課せられた任務である。経済の領域で、国家のなすべきは国民の経済的育成を計り将来の発達を期することであるが、そのために外国の勝れたる経済力に對抗し得るまで、自国のあらゆる勢力を培養せんとする国民的努力を指導しなければならぬ。ここにリスト経済学の核心的地位を占めている生産力の理論が意味あることとなる。この理論はすでにゾーデン、ミュラーの闡説せるところであるが、それらはリストに至つて、生産力の「国民的体系化」に凝結したとみることができよう。かれはいう。「個人が如何に勤勉・節約・発明的・企業的・道德的・智的であろうとも、国民的統一なく国民的分業と生産力の国民的結合なくしては、その国民は決して高度の幸福と勢力とを得られず、またその精神的・社会のおよび物質的の財の永続的所有を確実にしないであらう」⁽¹³⁾。

スミスは一国の富を交換価値の集積とみたが、これらの富は短い期間、個人の生計を保証し得るが、欠乏と困難に對し長期の保護をなし得るものでない。かれは、「個人は富すなわち交換価値を所有しているかも知れぬが、し

かし価値ある物を創る力を消費する以上に所有していないならば貧乏となる。個人は貧乏であるかも知れぬが、併し価値ある物を創る力を消費する以上に所有しているならば富裕となる。従つて、富を創造する力は富よりも無限に重要である。」⁽¹⁴⁾ といひ、また「生産力は私人の場合よりも、利子収入によつて生活することのできぬ国民全体の場合において、なおさらそうである。」⁽¹⁴⁾

かかる生産力は財の所有による能力でない。個人は所有せずして、自己の能力によつて生存の基礎を得るからである。もつとも、個人はこの能力を、その生産力の大部分を社会制度から汲みとるのである。すなわち、基督教・一夫一妻制・奴隸制および農奴制の撤廃・王位継承・印刷文字および印刷機・郵便・貨幣・度量衡・曆・時計等の發明・治安警察・自由土地制度の採用および運送機関等、これらはみな生産力の源泉となつてゐる。⁽¹⁵⁾ 法律その他の公共制度は直接、交換価値を創造しないが、なおよく生産力を哺育する、とも説いてゐる。また次の所論がある。スミス学派は「交換価値を研究対象とするため、豚を飼育するものは社会の生産的な一員であつて、人間を教育する者は不生産的な一員とみる。これは豚を肥育し風笛または丸薬をつくる者は生産的であるが、青年および成人の教師・芸術家・医者・裁判官・行政官等は更に一層生産的であると訂正すべきである。」⁽¹⁶⁾ ここでモリストはミューラーとほば共通の見解を示している。

生産力の理論は引続き保護関税論に展開し行く。一国の繁栄は国民の生産力の発展に依存する。生存力拡大のためには全国民協力してその精神的・社会的諸力を獲得しなければならぬ。これは現在の利益を犠牲にして将来の利益を確保することになる。他国の發達した工業力が後進国の工業力を圧迫するが如き状況にあつては急きよ関税制度の採用により自国工業を保護する必要がある。国民はそれによつて価値の犠牲を払うが、これは生産力の獲得に

よつて償われよう。

叙上によつて、リストの国家と経済との交渉をその生産力の理論を仲介として窺いきたわけであるが、その結論は主著の第十六章に要約されている。

そこでは、人民の経済と国民経済とが厳かに区別される。人民の経済は国家市民のそれであり、国家干渉の行われざる、すなわち「政治は経済から除外され、」各人の経済活動の原則的自由を認めたスミス流の「商業社会」であろう。この種の経済は「それ自体において完全なる国民の発達ならびに、その独立の存続および勢力を顧慮して規制される必要がなく」規制は「統一ある大国民もしくは国民経済なるものが存在しない場合に発達し形成される」ところの、社会経済一般の自然法則⁽¹⁷⁾だけで十分である。

これに反し、国民経済は「国家もしくは聯邦国家が人口・領土・政治的諸制度・文明・富および勢力によつて独立の資格を有し、永続と政治的勢力を主張し得る」（傍点は筆者）とき、人民の経済が国民経済となる。その暁きは「人民の経済と国民経済とは同一不二である」として、国家干渉との関連において始めて、国民経済の把握が可能なることを示している。この点かれも亦、ゾーデンの流れを汲むものとみることが出来る。

また、かれが国民経済なる独逸語が「始め Staatswirtschaft, 次に Nationalökonomie, 後に Politische Ökonomie, 更にその後 Volkswirtschaft」と呼ばれる「順序を明かにしているは興味あることである。かれが主著を「政治経済学の国民的体系」と名付け、フォルクス・ヴィルトシャフトを避けた事情は、当時独逸国民経済の発達段階が未だ完全なる「経済的統一をみた国民」の域に到達しなかつたためかも知れない。それにも係らずカール・ハインリッヒ・ラウは一八二六年すでに「国民経済学原理」を出し⁽¹⁸⁾、従来の Nationalökonomie に代うるに

Volkswirtschaft」を使用し今日の用法を開いた、ことを併記しなければならぬ。

註 (1) フリードリッヒ・リストは一七八九年八月六日南独ロイトリンゲンの鞞皮匠の子として生れ、一八四六年十一月三十日テロルのクーフスタインで自尽した。

かれは一八一七年チービンゲンの行政学教授となつたが、一八一九年フランクフルトの独逸商工業同盟に参加したため官職を罷免され、その後各種の扇動行為に出で処罰を受け、一八二五年遂にアメリカに渡る。ペンシルヴァニアにおいて農業経営・雑誌編集を経て炭坑経営にあたり産をなす。また石炭輸送のため鉄道の建設に従う。その間「アメリカ経済学綱要」を著す。

一八三二年ライプチヒのアメリカ領事に任命され帰国、三三年独逸鉄道綱の立案とその普及につとめ、三七年ライプチヒードレスデン鉄道の一部開通をみた。これと併んで、独逸関税同盟の結成に心血を注ぎ、同志と共に東奔西走席の温まることなく、ついに精神病の侵すところとなつた。

かれの著作はフリードリッヒ・リスト協会によつて前後十巻に収められ公刊されているが、経済学については、主著「政治経済学の国民的体系」(一八四一年)、前記の「アメリカ経済学綱要」(一八二七年)、「政治経済学の自然的体系」(一八三七年)および「農地制度・零細経営および国外移住」(一八四二年)があげられよう。また晩年の政治的論策の一つである「独逸人の政治的・経済的国民統一」は、独逸統一の理想を説けるものとして高く評価されている。

(2) 堀経夫博士「経済学史通論」(昭和二十八年)二八五頁。

(3) Soden, Ebenda. Bd. I, Vorwort. IV.

Müller, Ebenda. Bd. II, S. 20.

(4) Treue, Ebenda. S. 123.

(5) Friedrich List, Das Nationale System der Politischen Oekonomie. Gerig Ausgabe, 1950. S. 20.

フリードリッヒ・リスト著 谷口・正木両氏訳 「国民経済学体系」改造文庫 上巻 二頁。

Hans Ritschl, Friedrich Lists Leben und Lehre. Tübingen. 1947. S. 106.

(6) リスト経済学の起源に就ては小林昇教授「経済学史研究序説」(一九五七年)二八七頁以下参照されたい。

独逸経済学における国民経済の意味(赤羽)

独逸経済学における國民經濟の意味（赤羽）

四〇

- (7) Friedrich Lenz, Friedrich Lists Kleines Schriften. S. 129.
- (8) Lenz, Ebenda. SS. 132—33.
- (9) Lenz, Ebenda. S. 135.
- (10) 酒枝教授は國民と國民體とを同視せず、國民のなかに事態としての國民體を區別せよ、と主張される。
酒枝義旗氏「民族の形成—歴史主義における國家と經濟」(板垣与一氏編「國家と經濟」昭和二十七年)一一〇頁以下。
- (11) List, Ebenda. S. 268. 邦訳二六八頁。
- (12) Lenz, Ebenda. S. 17.
- (13) List, Ebenda. S. 66. 邦訳七四頁。
- (14) List, Ebenda. SS. 220—21. 邦訳二二四頁。
- (15) List, Ebenda. S. 227. 邦訳二三〇頁。
- (16) List, Ebenda. S. 232 ff. 邦訳二三五頁。
- (17) List, Ebenda. SS. 290—91. 邦訳二卷一〇頁。
- (18) K. H. Rau, Lehrbuch der Politischen Oekonomie. Heidelberg. 1854, Bd. II, S. 55.
Laun, Ebenda. S. 20.

五

リストは市民の自由なる經濟活動が國家政策の對象にとりあげられ、干渉を受ける程度に⁽¹⁾応じて Nationalwirtschaft, Volkswirtschaft に進むと説いてい、これは右に指摘した如くである。この Nation 及 Volk なるのじつ同義に解され、フォルクは常に國家國民 Staatsvolk と見做されていた。従つて、國民經濟の原理は市場經濟を離れて政治經濟の範疇をもつて律せられねばならず、スミス流の自由主義的理論と異なる体系化が試みられたわ

けであろう。

独逸歴史派の提唱者と考えられる、ウィルヘルム・ロッシャーは国民経済を国民（民族）と共に発生すると説きリストに同じ、「国民は明かに一の實在であり、それを構成する個人でない。」しかも、国民の生活は各種の生活面を内面的に結合せる一体となつて現われ、国民経済はその一側面である。⁽²⁾ところで、国民は国家国民たるかというに必ずしもそうでない。この間の事情を、マクス・ウェバーは「民族を政治的に統一された国家市民のその時折の総体として純合理的に考察することは彼（ロッシャー）の氣に入らなかつた」ので、むしろ文化国民の如く解釈し、「文化の担い手として意味ある全的存在の、具象的な全体が彼にたちあらわれた。」⁽³⁾とみるのである。

もつとも、ロッシャー自身、国民経済そのものに就ては、国家意思の存在を認めている。「各経済はそれぞれ意思を前提とする。それは個人・法人あるいは国家に帰属するが、国民全体にはない。」さらに「国民経済の計画的行動は経済法則および国家機関において最も明白に表示される。」⁽⁴⁾（傍点は筆者）。

次に、カール・クニースになると、リストの国民的思考は一そう深く掘下げられ、民族は歴史的存在として扱えられる。（フォルクはかれの場合、とくに民族と読まるべきであろう。以下同じ）。民族は「平等な個々人の表面的に区切られ総括された集合体でなく、国民体と歴史的体験によつて独特に規定され、かつ国家的に一体となつた全体」（傍点は筆者）⁽⁵⁾であり、同時に「ただ一時的に何らかの形で現存するものでない。反つて時代と世代とを貫く永続的な存在をもつている。」⁽⁶⁾というのである。

かように、民族は人間生活の基本的存在であり、国家と一体となつて国民を形成する。これは民族が国家以上の實在であり、国家は民族が組織され存続するための形式たる任務を果すと考えられたためであり、⁽⁷⁾民族が永続的存

在となり秩序ある形態を整えるは常に国家に一体化された場合に外ならぬと、クニースに考えられたのであろう。

かくて、漸く経済のおかれた地位が明かとなる。「諸国民の経済状態と発展はかれらの全生活有機体と密接に結びついた肢体として観察されてよい。国民経済はじじつ（他から）孤立し、まったく独立した存在でない。それは国民生活の経済的側面である。」⁽⁸⁾ これもまたミュラーやロッシヤーの如く、一つの国家有機体理論である。

ところで、われわれがこれまで追求した国民経済の国家的性格は、かれにおいても無視されていない。民族が国家的結合たる以上、国民経済は国家依存の色彩を濃厚にするはもちろん、国家権力の国民生活への作用は経済政策やその他の国家施設を通じて強まると、みられているからである。以上、ラウムによつて問題として提起された Volkswirtschaft としう経済学上の一概念が、―それは今日なお独逸経済学体系では基本概念の一つであるが⁽⁹⁾―百五十年前独乙のスミス学者によつて新造されたが、浪漫主義の擡頭以来、国民経済は国家の一分肢として国家的経済的内容をもつものに改鑄された。

独逸浪漫派の先頭に立つ、アダム・ミュラーの国家理論は周知の如く極めて復古的であり、中世の等族国家を理想とせるものであつた。これに反し、リストには一段と近代的精神が横溢し、独逸民族の統一的・包括的国家の建設を痛感されてい、保護主義の主張の下に生産力の培養を通じて先進国の牙城にせまらんとした。国民経済は国家を離れてこの使命を貫徹することは不可能と考えられた。このことはかれに続く一連の歴史学派の巨匠にも相通するところである。

一八七一年、独逸帝国が建設され、政治的統一が完成するに至ると、独逸民族は完全なる国家国民たる実を示し、国家なき民族の意味なきことが自覚せられるに至り、⁽¹⁰⁾「独逸帝国の国民経済学者」としての誇りをもつ、かの⁽¹¹⁾

グスターフ・フォン・シュモラーが、「種々なる国家に属する無数の個人経済を、一つの国民経済として言い表わし包括することは決して出来ない」と揚言したことは、国民経済の具象的国家に依存する所以を、最も明白に伝えた文字といわねばならぬであらう。⁽¹²⁾⁽¹³⁾

—一九五九・八・二六—

- 註 (1) Laum, Ebenda, S. 24.
(2) Roscher, Ebenda, S. 41.
(3) Max Weber, Roscher und Knies und die logischen Probleme der historischen Nationalökonomie. Gesammelte Aufsätze für Wissenschaftslehre. 2 Aufg. 1951. 松井秀穂氏訳「ロッキンヤーとノース」(昭和三十年) 二五頁。
(4) Roscher, Ebenda, S. 32.
(5) Karl Knies, Die Politische Oekonomie vom geschichtlichen Standpunkte. Neue Ausgabe, Leipzig. 1930. S. 157
(6) Knies, Ebenda, S. 158.
(7) T. Pütz, Karl Knies als Vorbereiter einer politischen Volkswirtschaftstheorie. Schmollers Jahrbuch. 1936. Erste Hef. S. 10.
(8) Knies, Ebenda, S. 141.
(9) Laum, Ebenda, S. 5.
(10) Laum, Ebenda, S. 26.
(11) 榎原謙教授「社会科学としてのマニッシュ経済学研究」(昭和三十三年) 三〇八頁。
(12) G. v. Schmoller, Grundriss der Allgemeinen Volkswirtschaftslehre. München. 1920. S. 4 ff.
(13) Laum, Ebenda, S. 26.